



# 人生観



川崎ゆきお

「人生観を変えようと思うんだ」

村瀬がポツリと言う。

「ほほう...」

相田は不思議な動物でも見るように村瀬を見る。

見るからに村瀬は変える必要のありそうな風貌である。

「珍しいなあ。今時そんな言葉を使う人間がいるんだ」

「人生観を変えるのが珍しいのか？」

村瀬はフケ混じりの前髪を手でかきわけ、鋭い眼差しで相田を睨んだ」

「小学生のころ聞いたかな。それから長い間そんな言葉を使う人間に逢わなかった」

「そんなに珍しいことなのか？」

「人生観を変える...とはなかなか人には言えない。で、どうなの？」

「生き方を変えようと思うんだ」

「生き方...」

相田はそこでまた立ち止まる。

「生き方ねえ」

相田は繰り返す。

「何かもたつくなあ。どうしたんだよ相田君。俺、何か変なこと喋ってるか。あ、まだ何も具体的に話始めていないけどさ」

「そういう話題をする人だったんだ」

「人生観なんて、滅多に変えないよ。だから聞き馴れないだけさ。で、恥ずかしくない？」

相田が尋ねる。

「恥ずかしい話じゃないでしょ。真摯で、真っ当な...」

「悪い本でも読んだの。それとも昔の青春ドラマでも観たの」

「違うよ。いつも考えていることだよ」

「村ちゃんはいつも人生観を考えながら暮らしているんだ」

「君もそうだろ？」

「それはない。だから新鮮なんだ...村ちゃん言葉が」

「聞く気はあるの？」

「あるさ、言ってみなよ」

「今度の受験、また落ちそうだから、人生観変えてみようと...」

「なんだ、回避方法か」

「俺の人生観を変えれば、大学なんて行く必要はないし、もうこんな予備校来ることな

いんだ」

「なるほど、便利なスイッチだ」

「俺より相沢、お前のほうが成績悪いんだぜ。一緒に人生観変えようじゃないか」

「どう変えるんだ？」

「それを一緒に考えようよ相沢君」

「君はやはり人生観変える必要があるね」

「...だろ」

了